

# 「音楽大学卒」を活かすために教職員ができること — 芸術系大学の事例から考えるこれからの音大キャリア支援 —

伊藤華余子

## はじめに

近年、大学のユニバーサル化が話題に上がる。アメリカの社会学者のマーチン・トロウ（1976）が、高等教育の進学率が15%を超えると「エリート段階」から「マス段階」、50%を超えると「ユニバーサル段階」へ移行し、「エリート段階」よりも中途退学者が増加することや共通の一定水準の消失等、高等教育のあり方が変化すると述べた。ユニバーサル化と共に、日本では、不本意入学者についての話題がしばしば上がる。不本意入学とは、希望しない大学に進学した学生のことを指し、(1) 第一志望不合格型、(2) 合格優先型、(3) 就職優先型、(4) 家庭の事情型、(5) 学歴目的型 の5つのタイプに分類できる（小林，2000）。最近では、大学入試制度の改革により、大学入試センター試験などの存在が明確な序列化を生み出したと考えられ、統一試験は大学序列化だけでなく大学評価基準も一元化し、このことが不本意入学者という負の産物を生み出しやすくしてしまったと指摘している（竹内，2014）。

2020年から継続するパンデミックは、多くの学生への学生生活の充実度、あるいは進路選択に大きな影響を及ぼしたと考えられる。2022年春卒業予定の高校生の進路選択に新型コロナウイルスの感染拡大が大きな影響を及ぼし、全国2割以上の高校で都道府県外への進学を希望する生徒が減っていることが、株式会社さんぽうの調査で明らかになった。都道府県外の大学への進学については、22.4%の高校が「減った」と答え、「増えた」と回答した高校を上回った。2020年4月の第1回緊急事態宣言で都道府県境を越えた移動の自粛が呼びかけられたことも影響しているとみられる。さらに、コロナ禍での家計困窮などもあり、志望校の変更が増加傾向にあり、結果として専門学校進学希望者の増加につながっている。

一般的に、不本意入学者は、大学入学後も大学への適応感がないケースや、GPAの低さ、中退学の発生等問題が挙げられている。不本意入学が後の大学生活への影響を及ぼすとするならば、就職に関する不本意感は、今後のキャリア形成にどのような影響をもたらすのであろうか。大学入学に関する不本意感や、大学の序列が就職活動にも影響を及ぼしていると考えられる先行研究も見られる。葛城（2018）は、ボーダーフリー大学の実態として

「基礎学力欠如、学習能力欠如、学習への動機づけ欠如」(p.111-113)を挙げており、また、大学の偏差値や入学難易度によって「受験学習をまったく経験せずに選ばれてしまったノンエリート層」(居神, 2010)たちは就職活動を前に、基礎学力の低さから例えば筆記試験を通過できない、アルバイト等の面接に不採用になる等、社会に出るにあたってのスキル不足を指摘されることがあることと、ホワイトカラー層への就職が期待できず、フリーターを生み出す可能性も示唆している(居神, 2010)。他方、音楽大学等の専門大学は、志を持って入学をする学生が主体であるため、その点は一般大学と異なるが、例えば国公立大学を不合格になったケース、首都圏の音大を志望したが願いが叶わなかったケースも少なからずあると考えられる。不本意入学だとしても、「音楽」という目的を持ち、音楽を究めることを目的として入学している学生たちには、音楽活動を経て得た、偏差値で測れないジェネリックスキルを持ちわせており、大学教職員は音楽スキルだけでなく、学生個々の個性、ジェネリックスキルを更に高める役割を担っているのではないだろうか。勿論、そのためには、「教員だけ」の関りではなく、「職員」及び関わる全てのスタッフが、「学生の成功」を考えてサポートする必要があると考えられる。

現在名古屋音楽大学で、キャリア関連講義とキャリア支援センターでの学生面談、就職活動講座を担当している筆者は、勤務を始めてから学生がぶつかるキャリアの問題に直面をしてきた。教員を目指すが正規採用に至らず涙を流す姿、周りの空気感から志望する一般企業就職へのしづらさを感じて悩むケース、一般企業就職を望むもののご両親のご意向で断念をせざるを得なかったケース、ご両親を安心させるために音楽を諦めて就職を決断する学生も見られ、そのたびに筆者自身ができることは何なのかを考えさせられた。不本意な「就職」にならないように、できるだけ学生の本心を知り、できるだけ彼らの意向に沿ったサポートを考えるが、そのためには学生自身がまず自分自身を信じ、音大生であることを誇りに感じた上で将来のキャリアを考える必要があると考える。

このことから本稿では、「学生の成功」を共通目的とし、他大学では芸術系学部のキャリア支援をどのように展開をしているのか、またその課題が何であるのかを先行研究によって明らかにし、今後の名古屋音楽大学でのキャリア支援に活かしていこうと考える。

## 1. 芸術系大学における現状と課題

他大学、特に芸術学を中心としてキャリア支援への取り組みや課題について明らかにする。新谷(2020)によると、調査した芸術系私立大学では、「保護者からも高校からも就職率についてあまり問われない」(p.36)ことを挙げており、専攻によってプロの芸術家を目指す割合は異なるものの、進路未決定のまま卒業することへの違和感がないことを述べている。また、芸術系大学では就職活動をする、就職をすることが一般的ではなかったことから、「就職活動を行うこと自体が特別視されていた」(p.36)としており、あわせて、

レッスン等教員とスケジュール調整が難しいこともあり教員の理解が得られないという声を取り上げている。宮永ら(2017)は、美術大学の事例を取り上げ、工芸科では学生が、「自らの学んでいることと社会との接点が見出しにくい」(p.58)ことから卒業生の講演を行い、学生のキャリア意識の形成に努めた。その結果、聴講した学生は就職について前向きに捉えたり、将来像が明確になるなど、有意義であったと感じ、一定の効果が見られた。

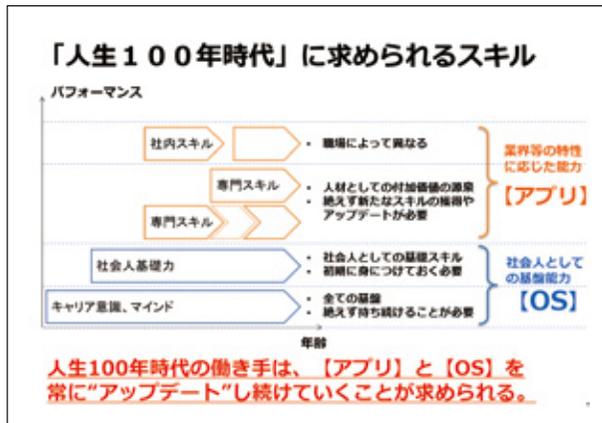
喜始(2014)は美術系学科では「就職を「制作の休止・趣味化」とする独特な意味づけ」(p.51)があるとし、その背景として「自ら作家でもある実技系教員や強く作家志望の学生から就職に対する抵抗感の言明がなされる場合もある」ことを指摘している(p.51)。その上で実際芸術家として活躍する方への調査では、活躍するためのスキルの1つとして「自分自身を見せるという術」(p.53)を鍛えていないことを述べ、大学時代に芸術家としての技術と共に実践的な見せ方や仕事を得るノウハウなどについても学ぶべきであることが挙げられている。海外では、このノウハウについてもレクチャーをしている。大島(2019)によると、海外の音楽学校でのキャリア教育について取り上げている。アメリカのイーストマン音楽院では、音楽起業家としての心構え、模擬オーディションや、「自分のメッセージを最良な形で伝達する方法」(大島, 2019)、マナーも提供をしており、イーストマン音楽院では、「市民音楽家(アーティスト・シチズン)として、音楽演奏を通して社会変革や暮らしの向上を促進する企画を立て、実際に取り組む」こと(p.70)を通して実際に企画力を高め、実践する場を作っていることとあわせて、プロとして音楽活動をしている方をゲストスピーカーを迎える講座も行っているという。演奏家として活動をする上では、自身という商品をいかに外部にアピールできるかも大きな課題である。これらについても、大学のキャリア教育、及び専門講座の中で身につけるべき点なのではないかと考えられる。

一般企業などの組織で働く上で必要なスキルについてはどうであろうか。森田(2015)は、芸術学部で身につく能力のうち、採用したいと感じる能力について挙げている。そこには、「実践力、粘り強さ、柔軟性、発想力、正解のない仕事(課題)に取り組む力、専門性とマルチな能力、マネジメント力、表現力、コーディネート力、経営的センス、メディアデザイン力」(p.132)が上位10位であり、芸術関連、あるいはそれ以外の企業によってランキングされている。この力の中は、音大でも身につくと考えられ、芸術系企業、あるいは一般企業でも音大卒は十分に求められると考えてもよいのではないだろうか。また、森田(2015)は、大学入学時から行う教育として、基礎学力の向上やマナーと共に、「専門的な知識や技能に加え『一般的なジェネリックスキル育成』」(p.135)によって、「芸術関連の業種、そして芸術関連以外の業種においても、活躍のフィールドが広がると考えられる」と述べている。

企業側の意見として大内(2016)は、音大生を積極的に採用する企業の意見として、「めったなことでは辞めない、根性がある」(p.78)と述べているが、音楽の世界は性差がなく、

実力主義の世界で、年齢も性別も関係がない。「そもそもダイバーシティな世界」であり(p.65) 常に競争社会に身を置いてきている。多くが幼いころからその世界で切磋琢磨している音大生は、企業でも活躍できる素養の1つがすでに身につけていると言える。それでは名古屋音楽大学ではどのような取り組みがなされているのか。

## 2. 名古屋音楽大学のキャリア教育で扱う「社会人基礎力」



(経済産業省「社会人基礎力」より引用)

筆者は2013年より、名古屋音楽大学でキャリア関連科目を担当している。

「音楽と人生」では2年生、3年生を対象に、また「キャリア教育論」では教職課程を選択した1年生を対象に実施しており、その目的は異なるように思われるが、筆者は授業の中で「自身のキャリアを考える」ことを1つのメッセージとして伝えている。そのために重要だと考えるの

は、社会人基礎力の現在地を確認し、それを意識して伸ばしていくことである。

この社会人基礎力とは何か。経済産業省によると、『「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力（12の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力』をさし、2006年に提言されたものである。近年では、人生100年時代と言われるようになり、これまでのように60歳の定年を迎えたあとは悠々自適な暮らしを送る時代ではなくなった。これは日本人の平均寿命が延びただけでなく、年金が十分に支給されづらい世の中になり、一般的な定年後も引き続き何らかの形で就労をし、金銭を得る必要があることも背景にあると考えられる。学生たちが今でいう「定年」を迎えるころには、今よりも複雑で不安定な社会になっているのかもしれない。いかなる時代であっても、いかなる状況であっても活かせる力を学生時代に身につけ、伸ばすこと。またそれを自身が「強みである」と理解し自信を持って社会に出ることができるよう支援することが、授業を通して求められた責務であると感じている。当該授業に留まらず、就活講座の中でも折に触れて自身の社会人基礎力に焦点をあて、今の立ち位置や伸びしろを考えるワークを取り入れている。また、「音楽と人生」では、社会人基礎力を各自測定するとともに、親しい友人や家族からその力の他己評価を貰い、自己評価とのズレ、一致点とその理由を考える時間を設けている。本稿第1節で森田(2015)が触れた、マナーについても席次や立ち居振る舞い、

敬語などについてもクイズ形式で理解を深めたり実践する時間を設け、音楽のスキルだけでない人間力を伸ばすように、そして各々が自信を持って社会に出ていくことができるよう極力サポートしたいと考えている。履修学生が毎年50名程度を越えるが、1人1人の学生の成長や、筆者が感じた点についてはなるべくフィードバックし、学生自身が授業を通して成長を体感できるような働きかけも行っている。

就活講座ではノウハウ提供をするだけでなく、その実践練習を通して、各々が自分のキャリアに向き合えるようなワークや、迷いがあつたり自信を無くしている学生にはキャリア面談への誘導を行い、個別に会話する時間も設けている。就活はゴールではなく社会への入り口に立つ権利を得ただけであるため、「学生の成功」として、納得いく就活を行うだけでなく、自走できる力を養うことも必要であると考え。しかし、この「学生の成功」において、キャリア支援センターや筆者というキャリア支援者だけでは物足りないものとなる。音楽業界の知識は当然のことながら教員の皆さんと比較して乏しく、教員が経験してきたモノを学生に教示し、進路に迷う時は適宜情報提供をしながら、学生の背中を押しただけだと良いのではないだろうか。

### 3. 名古屋音楽大学のキャリア支援をどう展開するのか

これまで多くの学生との対話の中で学生が就活をするにあたり、また働く上で「音大卒であるメリット」を感じていたことがわかった。例えば、就活のシーンでは「音大卒というだけで目立つ」「ガクチカ等話す内容が他者と被らない」「緊張しない」ことがしばしば挙げられ、就職した後、働く上では「忍耐力」「目上の方との接し方」「やりきる力」を挙げている卒業生が多い。ところが、就活前の学生は、「音大卒であるデメリット」を感じていることが多かった。というのも、就活の知識が圧倒的に少ないと捉えていること、大学での活動が多いため時間の捻出が難しいと捉えていること、音大と一般企業の親和性がないため受け入れてもらえないのではないかとこの3つの大きな疑問を抱えていた。卒業生らの声を就職活動中の3年生に共有をしたところ、彼らが考えていた「音大卒は就活にマイナスである」という固定概念を打ち崩すことができたようであった。また、4年生で第一志望の企業に就職が決まった学生は、就活の前半では一般大学の学生の受け答えに無理やり合わせようと思ったことがあったという。しかし、面接を進める中で、面接官からの音大への好意的な態度から、「自分は自分でよい」という心境に変化し、そこからは音大生であることを武器に、面接に挑んだところほとんどの企業で最終面接まで進むことができたという。これから就活を迎える3年生にとって、身近な先輩の体験談の影響は大きく、聞いた直後から前向きな気持ちになり、「自分でもできる」という自信を得た学生も多かった。この「自分でもできる」という自己肯定感を育成する土壌は音大に多数ある。1つ1つの演奏会、試験、伴奏、コンクール出場、ボランティアでの演奏活動、また教員とのレッ

スン等、一般大学にはない活動も多い。4年間の音大生活を通してそれぞれが「自分でもできる」という思いを心に育て、伸ばし、花を咲かせていかれるようにキャリア教育に関わる教員だけでなく、全学でサポートし、卒業式を迎えさせることが求められるのではないだろうか。

## おわりに

これらの先行研究を通し、多くの芸術系学部で学ぶ学生たちや教員は、彼らのキャリア形成について悩み、時代に即した対応を行ってきたと考えられる。しかし中でも、こうあるべきという固定概念に縛られて、学生も苦しみ、また教員も、本当に望む形に気づきながら適切な支援が出来ていない可能性も否めない。人生100年時代、人がそれぞれキャリアに向き合う時間が長くなっている。学生がどうなりたいたのかを考えてそれを追求できる土壌を作り、心からの支援を行うこと（物質的、精神的なもの両面で）が必要であると思われる。

大学の専攻に縛られて、また大人の意向で進路疎外をすることは望ましくなく、学生本人が自分の長い人生を俯瞰してみた時に、「どうなりたいたのか」を考え、自分で決断ができることが望ましい。しかし、20年程の人生の中で持ちえた知識や経験、人脈によって必ずしも必要な情報が学生個人の中に存在するとは言い難い。そこは我々キャリア支援者、あるいは教員がサポートする必要があると考える。しかしそのサポートは、学生の為でなくてはならない。仕事は生涯1つのものではなくなり、複数のキャリアを持つことも稀ではない。どのような職場であっても、環境であってもその人らしく、自信を持って働く為に、音大で得たチカラはきっと生きるはずである。そしてそのチカラがある学生と共に学べることを教員自身も誇りに思い、そのチカラを伸ばす支援をしていきたいと考える。

では、「学生の成功」とは何だろうか。米国の研究者らは「学業成績、教育目的に沿った活動への参加、満足感、望ましい知識・技能・能力の獲得、持続性」(Kuh, 2006)、「知識の取得と認知能力の発達、様々な形の心理社会的な発達、道徳的推論能力の向上、態度や価値観の形成・洗練・適用、教育の達成、経済的・職業的報酬、生活の質」(Terenzini, 2007)と定義している。私たちは改めて、「学生の成功」の為に、教員と職員が手を合わせて支援していかねばならないのであろう。

今後は、音大生がそれぞれの力を活かして進みたい道に進むために全学でどう支援すべきかを改めて検証していきたいと考える。

## 【文献】

- ・居神浩 (2010)「ノンエリート大学生に伝えるべきこと―「マージナル大学」の社会的意義」、『日本労働研究雑誌』

- 葛城浩一 (2018) 「多様化した学生に対する大学と教員「ボーダーフリー大学」に着目して」『高等教育研究』(21), pp.107-125
- 喜始照宣 (2014) 「芸術系大学出身者と労働」、『日本労働研究雑誌』 pp.50-53
- 株式会社さんぽう (2021) 「With コロナ時代の進路指導と高校教育に関するアンケート調査」(<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000065.000004505.html>) 2022年3月4日
- 経済産業省「社会人基礎力」(<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>) 2022年3月3日
- 小林哲郎 (2000) 「大学・学部への満足感」, 小林哲郎・高石恭子・杉原保史 (編) 『大学生がカウンセリングを求めるとき』, ミネルヴァ書房
- Kuh, G. D., Kinzie, J., Buckley, J. A., Bridges, B. K., & Hayek, J. C. (2006). 「What matters to student success: A review of the literature commissioned report for the national symposium on postsecondary student success: Spearheading a dialog on student success.」 Washington, DC: National Postsecondary Education
- Martin Traw 著, 天野郁夫・喜多村和之訳 (2000) 『高学歴社会の大学—マスからユニバーサルへ』, 玉川大学出版部
- 宮永春香・池田晶一・林泰史・大高亨・藪内公美・青木千絵・中村有希 (2017) 「工芸科におけるキャリア教育研究について」, 『金沢美術工芸大学紀要』(61), pp.55-66
- 森田佐知子 (2015) 「産業界ニーズから見た芸術系学部におけるキャリア教育の在り方」, 佐賀大学全学教育機構紀要, pp.125-136
- 大島路子 (2019) 「音大生キャリア教育の近未来—初回ティーチング・アーティスト養成講座を終えて—」『桐朋学園大学研究紀要』(45), pp.67-78
- 大内孝夫 (2016) 『「音大卒」の戦い方』, ヤマハミュージックメディア
- 新谷康浩 (2016) 「職業地位達成の問題構成—芸術系・人文系のキャリア教育に着目して—」, 『教育デザイン研究』(7), pp.33-42
- 竹内正興 (2014) 「大学入試構造と不本意入学者のアイデンティティ—AO入試は不本意入学者を減少させる施策となりえるのか—」 佛教大学大学院紀要 教育学研究科篇第42号
- Terenzini, P. T. (2007, October 18) 「From myopic to systemic thinking.」 NACADA 31st Annual Conference on Academic Advising, in Baltimore, MD.

